

柴の庵隱々の中に
見ゆ

文苑

柴の庵

中内蝶々子

千草にすだく虫の音いと淋しくあらしに散り布く木の葉のことに繁くれつる簾の水の聲の松風に答ふる風情なぞ秋の景色こそげに山里のあゝれをそへぬべけれ。一夜東の山の端にさしいづる月の艶なるに催されてそこはかとなくさまよひ行きけるに程遠からぬ谷陰の軒朽ちたる古寺の傍に燈火の光ぞする。さても怪しと見やればいつの頃結びたりけんまだ新玄き柴の庵なりけるいかなる人の浮世をのがれけるにかあらん看經の聲のうすかにきこゆるもゆかしく香の煙のうそるもこゝろにくし。

其まゝ過ぎ行かんも流石なれば玄ばし門の外に佇むはとにやがて看經の聲はやみぬ程なく障子ひらきいづるけはひのするに立ちよりて垣間見すればこれぞ我が親しかりし友某少尉が妻なりけるおのれおどろきていかなる故にてかゝる所に住み給へるぞと問ひければ妻のいはく妾ハ少尉モのゝ妻とはいへと名のみにして、いまだ合巻の禮をさへ擧げぬ身なれば、の君に對して、いろでか憚ることのあるべき更らによきえにしを求めたまへ。あたら御身を一生深山の埋木となしはたさんはいかに惜しからざらんなすむる人もありしかゞよし、その禮ハ學

この貞婦を借りて世に益する亦以て世を罵倒し去る

一篇の關鍵亦是一篇の総束

餘音不盡

漏庵に貞女を結ぶ月を結ぶ自己一系不

げずとも、妾ハ一度かの君にちぎりし身なれば、なぞか兩夫に見えんとしも思ひ侍るべき。とてかくハ世に遠ざりて、こゝには住みけるなりといへり。
さて、もけなげなる女かな。道徳やふれて人倫もだれし。今之世に、此女の如きものは、たゞ一人かある。歳月久しうかしづきし夫のうせたるにさへ、七七日の立ちも終らぬには、や他し男に身をまかすものゝ多きが例なるをや。あわれ泥中の蓮瓦裏の玉とは、此女なぞをやいふべからん。めでたしといふもおろかなり。
さて、某はおのれが幼き時よりの親しき友にてありけるが、去年の夏、大學を卒へ、幾はゞもなく陸軍豫備少尉となりて、第五師團にめされ、次で朝鮮の國にわたり志とさし後は、絶えず音信もなかりしを、今とし夏の初めつかたの頃なりし、その父なる人のたよりに、我が子は海城とやらんの戦に討死しけると知らせられせられぬ。げにも常なきは世の習ひにて、生きてかへるを期せぬは軍人の常なれど、凱歌舉げてかへり、こん日を待ち遠しく思ひつるは人の情なり。おのれことし國にらへりて、その墓に花なぞたむけつゝ涙止めがたくかなしかりけるに、今またゆくりなく、その妻なる人のさまを見たるいふばかりなし。まして、未來の夫と頼みたる人のうせに、きと聞きたる妻のそもいかばかり悲玄かるべきと思ひやられければとやかくと慰めつゝかへり見れば、まだ二十にも足らぬ花の顔、さし入る月に照り匂ひけるに、はらくと落つる涙をうちぬぐふも、一しほ哀にぞ見えければやがてまろり出でゝ松の木ばしら竹の垣、れきふし玄げき世の中にも、この一ふしの操を守れる、女

ある。かゝみにすべし女らよと月の光に筆とりつ。

乙未秋十月

稼堂陳人批

第五高等學校開校紀念式の歌

助教授 園 哲雄

阿蘇の峰より いや高き 君が御蔭に 立初めし
學びそころの さうえゆく その本つ日を ことはぎて
本にむくいん 真心の あかきはやがて 日の本の
光ともなり 大君の 御稜威やち代に ろれやかむ

述懐

禾の舍あるじ

君をおもふ道一筋をたかへすは骨はかりとも身はならはなれ
小濱道中小學子どもの車をねひくるがらうかはしくて
車にゆられながらかきて與へける

たれか子を跡れふをの子あはれやとみるもわか子に思ひあはせて

山中に水の上下にながるゝあり

末終に海にこそ入れ溪川の玄たゆくもあり上ゆくもあり

藤の谷橋といふ橋のかゝれるに

山高みかかる坂路をいつまでかよち登れどやふぢの谷はし